

うきたむ

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL 0238-52-2585

FAX 0238-52-4665

<http://www.pref.yamagata.jp/ky/shakai/222600/top.htm>

第29号

2007.6.15



▲補修を終えた復元住居

遺跡の発掘調査は、一般の土木工事と異なり予断を許さない。予想外の成果があるから調査の意義がある。それだけに常に最新の技術と考古学の最前線の研究成果を身につけた調査員が発掘調査にあたる。そのせいか全国各地にある遺跡公園の復元住居は、同じ時代にあっても細部は多様である。発掘調査の成果に裏付けられるからだ。と同時に復元は、発掘調査で分からなかった部分まで踏み込むので一層慎重にならざるを得ない。間違った復元は、見学者の誤解を生むからだ。

さて、当館のある「まほろば古の里歴史公園」の縄文時代竪穴住居跡の復元住居は、高島町金谷遺跡で発見されたものを復元したものである。平成九年当時の考古学研究成果にもとづき、また作業の安全・維持管理をふまえて復元された。

維持管理は安全点検に始まり蜂・蛇の駆除など相当な労力を要する。とくに大変なのは茅の葺き替えて、茅の確保と茅葺き技術者の確保である。茅葺き民家がなくなりつつあるため、どちらでも大変である。寺社も困って茅葺きをやめるところが多い。しかし、竪穴住居跡の復元住居はやめるわけにいかない。茅の確保と茅葺き技術の伝承は大きな課題である。当館だけの問題ではなさそうである。

復元住居と維持管理

考古資料館 館長

佐藤 鎮雄

第十五回企画展

縄文の至宝『押出遺跡』

開館十五周年記念開催

今年、当館開館十五周年の記念すべき年です。それを記念して当館所蔵品中、全国的に知られた高島町押出遺跡の出土遺物をたくさん公開したいと思えます。全国各地からの来館者の要請に応じて、

押出遺跡の出土品の全体がわかるように展示し、五、五〇〇年前の湿地縄文遺跡に迫ってみたいと思えます。

押出遺跡は、米沢盆地の北東部、南陽市から高島町にか



▲常時展示している押出遺跡出土品

けて大きく広がる大谷地に営まれた縄文時代のムラの跡です。縄文時代前期、現在よりも大変温かった時期で、大雨の少なかった頃に営まれた。ここ数十年くらいの大谷地を知っている人は、あんなところに人が住んでいたなんてと驚くほどです。

遺跡の場所は、大谷地の西側で北から吉野川、東から屋代川が流れてきて大量の土砂を押し出したところ。このように、当

時の縄文ムラが水を含んだ土砂や泥炭でパツクされた状態で発見されました。そこで縄文のタイムカプセルといわれています。そのため、普通の縄文遺跡では発見されないような出土品が多数見つかりました。漆で文様を描いた彩漆

土器は、大変見事な土器であると共に、日本の漆文化の源流を示すということで、全国的にも有名です。また、クツ

キー状炭化物は、これまた縄文クツキーとして全国的に良く知られています。この他たくさんのお土産品が大変特色があり、特に貴重であるということ。国的重要文化財に指定されています。

充実した展示に

これらの代表的な出土品は、平成八年に開催された特別展で公開しました。

しかし、それは膨大な押出遺跡出土品の極く一部であり、押出縄文ムラ全体像に迫ることはできません。

そこで、今回の企画展で、出土品の大部分を公開し、押出縄文ムラの全体像を理解していただくことになりました。展示サブテーマは「押出人の生業とくらし」で、縄文人の生活にスポットをあてて充実した展示をみていただくことになりました。

本来ならば県外の関連資料も含めて展示し、理解を深めたいところですが、展示室の規模もあり、先ずは押出遺跡の出土資料を観ていただくことにします。

理解を深めるために

■ギャラリートーク ■
「最前線の考古学者が語る
押出遺跡」

当館ではここ数年、考古学セミナーを企画展と連動させています。これについてはいろいろなお意見もありますが、受講者の方々から、セミナーで学んでから企画展を見学することにより、理解が深まり大変有り難いという声が多くあります。それに応えたものです。

また、見学者とのふれあいと見学者の理解を深めるため、他にギャラリートークを行います。講師はセミナーの講師にお願いし、充実したものにします。

十一月十八日(日)
午後一時三十分

記念講演会
「押出遺跡の世界」

山形県教育庁 佐藤庄一氏

第九期考古学セミナー

①七月十五日(日) 午後一時三十分より

「大谷地の縄文文化」 考古資料館長

佐藤鎮雄

②七月二十二日(日) 午後一時三十分より

「縄文の至宝―押出遺跡」 山形県教育庁

渋谷孝雄氏

③七月二十九日(日) 午後一時三十分より

「大谷地の縄文ムラ」 山形県教育庁

山口博之氏

④八月一日(日) 午後一時三十分より

「押出ムラの土器」 山形県埋蔵文化財センター

小林圭一氏

⑤八月二日(日) 午後一時三十分より

「押出ムラの石器」 山形県教育庁

石井浩幸氏

⑥八月二六日(日) 午後一時三十分より

「押出ムラのくらし」 山形県埋蔵文化財センター

菅原哲文氏

彩の時期 散策してみませんか

旬彩 歴史公園の「草・花・木」

古代の原風景をイメージして整備された「まほろば古の里歴史公園」には復元された縄文の竪穴住居や古墳など様々な歴史資料があります。これらを巡って歩くのも大変趣があります。もっと別の目的で散策するのも一興かと思えます。実は歴史公園にはたくさんのお花や木が栽培されており、季節の移ろいとともに訪れる人々の目を楽しませてくれます。

南西側(駐車場附近)

考古資料館の南側駐車場を安久津二号墳の方向に進むと落葉高木のクルミの木があります。五月〜六月にかけて、花が咲き、秋にぶどうの房のように実をつけます。縄文時代から食用として盛んに食べ



▲クルミの木と古墳

古墳周辺はきれいに草が刈られ、気持ちのよい芝生となっています。草木塔周辺の水路のそばにはアオソ、アカソが今年もひっそりと育っています。紫蘇の葉によく似たこの植物は、イラクサ科の多年草で、七月〜九月に花が咲きます。茎の赤いものがアカソで、それ以外をアオソと呼ぶようです。いずれも古くから織物の素材として、知られていました。同じイラクサ科の植物にカラムシがあります

古墳周辺〜草木塔周辺

られ、当館資料として全国的に知られている押出遺跡の縄文クッキーの材料にもなりました。

が、こちらも繊維を取って織物の素材として古くから利用されてきました。



▲アカソ



▲クルミの雄花

棚田周辺

奥まった沢には棚田があります。棚田の上には味噌根古墳群や高島石の石切場などがあります。その途中には桜が植樹されています。棚田には紫米や黒米、赤米の古代米が栽培されています。水田稲作が始まった弥生時代からしばらく栽培されてきた米です。棚田の上半分は古代ハスの大賀ハスが植えられ、夏には見事な花を咲かせ、人びとを魅了しています。



▲棚田わきのアヤマ

棚田の横には、アヤマ畑があり、五月末〜六月にかけてきれいな紫色の花を咲かせています。昔から日本人に愛され襖絵・屏風絵にも描かれてきた花です。アヤマ畑の上方には、毎年高島の花として名をあげつつあるボタンも植えられ、五月には訪れた人びとの目を惹きつけています。

復元住居周辺から東に

また、棚田の脇の道路反対側の斜面には実のなる木々があり、人びとを楽しませてくれます。

復元住居周辺から東側の安久津八幡神社参道までは、屈曲した池を連ね、お花畑や古代米の水田、万葉の花園など一大景観をなしています。数多くの花が咲き、アヒルなどの水鳥が楽しそうに泳ぎ回り人びとをなごませてくれます。桜の季節、ピンクの桜と黄色の菜の花に浮かぶように見える三重塔は高島を象徴する一大スポットです。

復元された縄文の竪穴住居の附近のカキツバタは、池のスイレンとともに鮮やかな花を楽しませてくれます。彩の季節、公園を散策して、自然と触れ合ってみませんか。



▲カキツバタとスイレン

戦国大名

伊達氏の重要拠点

じょう

原田城址

原田城址は、米沢盆地の西部、川西町小松を臨む西部丘陵の先端にあります。現在は置賜公園として整備され、当時の面影は薄らいでおり、その一角に造成された、川西町の花公園「ダリヤ園」の方がよく知られています。

原田城址の城主原田氏は、陸奥国伊達郡野路地頭から戦国大名にのし上がった伊達氏の譜代の家臣です。伊達氏が置賜地域を領有するようになると、この麓の中小松にある小松城に大江氏、桑折氏、牧野氏が次々と居城しました



置賜公園の入り口

田氏が配され、一段高いこの地に平山城を築き、置賜西南の要衝を守ります。これが原田城です。通称藤ヶ森にあつたので藤ヶ森館ともいわれ、犬川の谷口の高い所から小松城とともに睨みをきかせていたのであろう。歴代の小松城主も原田氏も伊達氏の重臣です。

原田氏が在城したのは十六代大蔵と十七代左馬介宗時の二代で、天正十九年(一五九二)に宗時が伊達氏移封にともない岩出山に移るまでで、わずか二十二年間です。

原田氏はその後、十八代原田甲斐宗資が宮城県船岡に移り船岡城主となり、十九代原田甲斐宗輔が寛文三年国家老になりましたが、お家騒動が起こり有名になります。NHK大河ドラマ「樫の木は残った」が放映されたときは観光客が訪れ賑わいました。

原田城址は城跡の形態から見て、さらに古い屋形があったと考えられています。比較的低い舌状丘陵を利用した山城で、現在でも本丸と二の丸の境には、深さ四m、幅十mの掘りが残っています。二の丸跡では方形の盛土により建物跡が推測できます。

現在川西町にある東陽寺は、原田氏ゆかりの寺で、原田氏の先祖の供養塔があります。宮城県柴田町にある東陽寺は、宗資のときに小松から移したものだといわれています。

我が館の展示品⑬

押出遺跡の玦状耳飾

玦状耳飾は、縄文時代前期から中期にかけて使用されたアクセサリーの一種で、形状が古代中国の玉器「けつ」に似ていることからこのように呼ばれています。

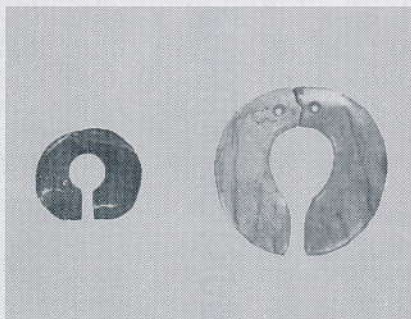
押出遺跡からは三点の玦状耳飾が出土しており、そのうち二点を展示しております。

一点は流紋岩製で、表面が丁寧に研磨され光沢を持っています。長さ四・八mm、幅五・一mm、厚さ六mmの円形で、中央やや上寄りに直径三mmの孔と、そこに至る切れ目が入っています。上部には破損したときの補修と考えられる孔が二ヶ所にあります。もう一点は黒曜石製で、流紋岩製より小ぶりの未完成の状態のもので

す。玦状耳飾は、切れ目の部分を耳たぶに挟んで装着する

場合と、耳たぶに穴をあけてはめ込む場合とが考えられています。前者の場合

は耳たぶに穴をあける必要がありませんが、後者の場合は、耳飾の大きさにあつた穴を耳たぶにあけなければなりません。これは耳たぶの伸長をともなうので生きているときでなければ使用できません。切れ目を耳たぶに挟む場合は耳たぶの伸長を必要としないので、死者を埋葬するときの装飾ではないかという見解もあります。



▲玦状耳飾